

## サトク・ボグラ・ハンの墓廟をめぐって

濱田正美

わが国における、イスラム化以後の中央アジア史研究の開拓者であられた故羽田明先生が関心を寄せられた様々な問題のひとつに、サトク・ボグラ・ハンの改宗伝説があった。先生は、カラ・ハン朝時代に既に成立していたと思しき伝承と、より後代の伝説の双方の内容を紹介し、「この伝説体系を詳しく検討すれば、トルコ族のイスラム改宗の事情を窺い、その後のイスラム化の進展を探ることも強がち不可能ではない」との貴重な示唆を遺された[羽田 1982: 435]。本稿は、先師の驥尾に付して、サトク・ボグラ・ハンの墓廟に関する史料を収集し、東トルキスタンの歴史上、宗教と政治の相い渉る部面において、この墓廟が小さからぬ役割を演じてきたことを明らかにしようとするものである。

### 1. 現在及び先世紀の墓廟の状況

サトク・ボグラ・ハンの墓廟(mazār)は、カシュガル東北約45キロメートルの Artuš (より古くは Artuğ, より正確には Astin Artuğ, 現今の発音では r が脱落して Atuš)の町に現存する。近年この地を訪られた梅村坦、堀直両氏の御教示によると、墓廟がある場所は、現在の市街地のはずれでアルトゥシュ河の河床(say)に近いところであるとのことである。現存の建造物の様子は、例えば、『新疆絲路古迹』(北京, 1985)に所載の写真などから窺うことが出来るが、煉瓦作りの、恐らくは正方形の壁に入り母屋の屋根が載せられた何の変哲もない建物である。が、しかし、これは比較的近年(早くとも1930年以降)に再建された物で、少なくとも1874年当時存在していた墓廟はこれとは全く異なるものであった。即ち、この年にここを訪れた H.W. Bellew の証言[Bellew 1975: 339], 及び彼に同行した E.F. Chapman が撮影した写真[Forsyth 1875: photograph No.81&No.82]によると、廟は高いドームを頂き、四隅にはこれ又小さなドームを持つ塔を配した堂々たる建造物で、全体が青・緑・黄のタイルで被われていたという。又東面するアーチ状の入口を鎖す丈の高い木製の扉には、これが1838年、(当時カシュガルのハーキム・ベグで

あった)Zuhūr al-Dīnの改修に係るものであることを示すアラブ語の銘文が刻まれているともいう。それから半世紀以上の後、1930年に若き日の Gunnar Jarring 氏が見たものは、ただ小さなドーム(恐らくは先述の塔)ひとつきりであった[Jarring 1986: 136]。ヤーリング氏によると先の建物は地震によって崩壊したとのことであるが、その年代は明らかではない。序でながら、1985年に来日された新疆大学教授 Abdušukur Muhammed Imin 氏の直話によれば、建造物内部の墓自体にも銘文の類は一切見られぬとのことであった。

## 2. 墓廟に関する最初の記述

周知の如く、サトク・ボグラ・ハンの墓廟に言及する知られる限りで最古の史料は、Ġamāl al-Ķaršī の *Mulḥakāt al-šurāḥ* である[Bartol'd, *Sočinenija* viii: 98-102]。14世紀の冒頭に成ったこの作品において著者は、煙滅して今には伝わらぬヒジュラ暦5世紀の人 Abū'l-Futūḥ 'Abd al-Ġafr (もしくはĠaffār) al-Alma'ī の『カシュガル史』によって、サトクの改宗の経緯を述べ、「サトク・ボグラ・ハン・アル・ガージーは344(955-956)年に没した。彼の墓はカシュガルの村落のうちのアルトゥジにあり、現在も栄え参詣されている<sup>1)</sup>」[Bartol'd 1898: 128]と伝えている。「現在(al-yawm)」以下はジャマル・カルシー自身の言葉であると解されようから、13・14世紀の交にサトクの墓廟が存在していたことには疑問の余地はない。但し、ジャマル・カルシーに時代的に先行する Maḥmūd al-Kāšgarī も *Hudūd al-'Ālam* の無名の著者もアルトゥジの地名には言及するものの、サトクの墓廟については沈黙しているという、些か訝しい事実も指摘しておきたい。<sup>2)</sup>

## 3. *Ta'riḥ-i Rašīdī*

管見の及ぶ限りでは、サトクの墓廟に言及する著作年代の明らかな第二の史料は、*Mulḥakāt al-šurāḥ* に遅れることおよそ二世紀半の *Ta'riḥ-i Rašīdī* であり、そこには以下の如くに記されている。

Ammā mazārāt-i Kāšgar awwal Satūḳ Buġra Ḥān ki az nasl-i Afrāsiyāb būda wa ġadd-i Yūsuf Ḳadir Ḥān wa Sulṭān Īlak Maḍī ast awwal kasī ki az turk musalmān šud vay būd ḥadīṭī dar bāb-i vay ki awwalu man aslama min al-turki Sātūḳ az darwīšān istimā' uftāda ast ki tawaġġuḥ bi-rūḥāniyyat-i vay fayḍ-i 'aẓīm baḥšad [BL, Or.157, f.222r]

「さて、カシュガルの墓廟はと言えば、その第一はサトク・ボグラ・ハン(の墓廟)である。彼はアフラーシャーブの出自であり、ユースフ・カドゥル・ハンとスルターン・イレク・マージの祖であった。トルコ人のうちでムスリムになった最初の人物は彼であった。彼に関するひとつのハディースがあつて、それは『トルコ人のうちにて最初にムスリムとなる者はサトクである』と言うものである。ダルヴィーシュたちから聞いたことによると、彼の靈魂に対する祈願は大きな利益をもたらすとのことであつた。」

ところで, *awwal kasī* 以下の一節に対応する E.D.Ross の英訳にはやや問題があるように思われる。即ちここでは, He was the first Turk to become a Musulman, and he is related to have said: “Satuk was the first of the Turks to become a Musulman” [Elias & Ross 1970: 300] と訳されているが, *ḥadīth* の語訳に問題がある。というのも以下で見る通り, 「トルコ人のうちにて最初にムスリムとなる者はサトクである」との預言者に帰せられる, 勿論偽作の, ハディースが実際に存在していたのである。思うにロスはこの事実を無視したか, 或はそれに無知であつたため, このハディースをサトク自身の言葉と理解し, かかる訳を捻り出したものであろう。とまれ *Mīrzā Muḥammad Ḥaydar* の記述から, 彼の時代にサトク・ボグラ・ハンの墓廟が存在し, 聖者廟としての崇拝を受けていたことが確認される。ジャマール・カルシーの伝える改宗譚には「アルトゥシュの二つのモスクの縁起としての宗教的要素しか」[羽田 1982: 447] 見いだされなかった。その後二世紀余りを関するうちに, サトクは聖者として崇められていたのである。この変容の経緯を窺うには, 故 A.Bombaci 教授の用語に倣って羽田先生が「近世の庶民文学作品」と称されたところの, 聖者伝としてのサトク・ボグラ・ハン伝に検討を加えねばならない。

#### 4. *Tadkira-i Buğrā Ḥanī*

現在夥しい数の『サトク・ボグラ・ハンのタズキラ』と題されたチャガタイ語写本が, 世界各地の図書館に所蔵されている。いちいち精査した訳ではないが, 現在迄に目賭しえた限りではその内容はいずれも, サトクの子孫たちの物語が付加されているものも存在するという点を除けば, 羽田先生が紹介された梗概に合致している。ジャマール・カルシーの所伝とこの「近世の庶民文学作品」との関係は些か微妙であつて, プロットは完全に一致するものの, 他にもや羽田先生の言を借りれば, 「同じ登場人物, 同じ筋書きであつても, 登場人物の役柄や舞台の道具立てはちがう。そればかりではない。劇そのものの解釈がちがうのである。最初は史劇に近かつたのに, のちにすっかり宗教劇になつ

ているといってもよい」。最も注目される相違点のひとつは、ムハンマドにまつわるプロローグが付加されている点であろう。即ち前掲羽田論文の二節(a)に相当する部分であるが、以下ペルシャ語で書かれた *Taḍkira-i Buḡrā Ḥānī*(この作品については後述)に基づいてその大略を紹介する(カギ括弧内は原文からの翻訳を示す)。

《預言者ムハンマドが大天使ガブリエルに導かれて天上界と地獄とを巡った Mi'rag の夜、預言者は天上界において未生のサトク・ボグラ・ハンの魂に出会う。大天使は預言者に、それが預言者の死後333年して、トルキスタンにイスラムを広める者の魂であると教える。預言者は喜び、「その時から、霊界('alam-i rūḥāniyyat)においてこの聖なる靈魂の教導に専心する。」地上界に戻った預言者は、毎日一度かの靈魂のために fatiḥa を誦する。その理由を教友の一人 Ma'ad ibn Ġabal が尋ねると、預言者は「このファーティハはトルキスタンの信仰の砦の門の鍵を手にした人物の教導のためのものである」と答える。その者の姿を現して見せて欲しいとのマーアードの願いに応じて預言者が祈念を凝らすと41人の騎士の姿が現れる。その姿が消えたとき、預言者は教友たちに向かって「トルコ人のうちにて最初にムスリムとなる者はサトクである」とのハディースを発する<sup>31)</sup>。》

このプロローグが果たしている役割に疑問の余地はない。それは、「史劇」を一挙に「宗教劇」に変容させている。そして先に見た通り、『ターリーヒ・ラシーディー』にこのハディースが録されているという事実は、聖者伝としてのサトク・ボグラ・ハン伝が、遅くともミールザー・ムハンマド・ハイダルの生きた時代には既に成立していたことを示している。更に又、このプロローグの内容からこれが成立した時代背景を窺うことも可能であると考えられる。注目される第一点は、これが Mi'rag<sup>31)</sup> を枠物語りとして利用していることである。この物語りは広くイスラム世界全域に流布したが、ティムール朝支配下の中央アジアもその例外ではなかった。1436-37年にヘラートで制作され、現在パリ国民図書館に所蔵されている豪華なミニチュールの故に有名な写本の存在は、この時代この地域におけるミールージュの物語りの盛行を示しているように思われる。少なくともこの物語りのある程度の普及を前提しなければ、先に見たプロローグの成立は考えられない。第二には預言者がサトクの教導(tarbiyat)に専心したと述べられている点である。言うまでもなく、スーフイズムではこの用語は、師匠が弟子に与えるそれを意味する。『ダズキラ・イ・ブグラ・ハーニー』には更に「スルターン陛下は(中略)教導を預言者の封印ムハンマド・ムスタファー(中略)の聖なる靈魂から得た。(中略)現し世('alam-i zāhir)では Ḥwaḡa Abu'l-Naṣr Samān(中略)から教導を得た。彼の活動は聖戦に限られ

たため弟子は持たなかった(f.61v)。」と述べられており、そのチャガタイ語訳の一写本では、サトクが預言者の教導を得たという一文に続けて「uwaysī になった。」と言う一句が付け加えられている[Bibliothèque Nationale, Supplément turc 1286, f.77v]。

現し身の師を経ず預言者の靈魂から直接に導きを受ける者を、Uways al-Ḳarnī に因んで uwaysī とよぶことは恐らくは 'Attār に始まるという [Husaini 1967 : 112]。Ġāmī はこの観念を拡大し、既にこの世を去ったシャイフ、ピールの靈的教導を受けた者をウヴァイシーと称した [Husaini 1967 : 112]。とりわけ、ナクシュバンディーヤにあっては現世の師承と同様にウヴァイシーであることが重視され、*Ḳudsiyya* の著者は、「この道統のうちに言及されたこれらシャイフたちの多くはウヴァイシーであった」と記している [Irakī(ed.) 1975 : 14-15]。現世と靈界にそれぞれ導き手を持つサトクのイメージは、15世紀以降のこうした宗教的雰囲気のうちで醸成されたのではなかろうか。

ところで先に言及した『タズキラ・イ・ブグラ・ハーニー』なるペルシャ語の作品は、実はサトク・ボグラ・ハン一人の聖者伝ではない。それは数多くのウヴァイシーたちのタズキラの集成であって、レニングラードの写本についてみると、その第6章(bāb)が Abū'l-Naṣr Samānī, 第7章が Sulṭān Satūḳ Buġrā Ḥān, 第7章に直接続く第3 faṣl がアブー・ナスルの子 Ḥwaġa 'Abd al-Futtaḥ の伝記となっている。これには少なくとも二種のチャガタイ語訳が存在することが知られているが、現時点では、このペルシャ語の作品が他のすべてのチャガタイ語の『サトク・ボグラ・ハンのタズキラ』の基になったオリジナル・バージョンであると断言することは不可能である。しかしながら全般的に言ってチャガタイ語作品のペルシャ語への翻訳は、ナヴァーイーの一部作品などを例外として殆ど皆無であること、又東トルキスタンにあっては、18世紀に至って漸くチャガダイ語がペルシャ語に対して優位に立ち、多くのペルシャ語作品がチャガタイ語に翻訳されたことを考慮するならば [Hamada 1990a : 102], ペルシャ語のサトク伝がチャガタイ語のそれらに先行すると考えてもまずは過たぬであろう。

『タズキラ・イ・ブグラ・ハーニー』の著者(もしくは編者)に関する情報は錯綜を極めている。レニングラードの東洋学研究所の写本 D112には著者の名は見えないが、同研究所が所蔵するチャガタイ語訳の写本 D114のコロフォンには、「Ḥwaġa Muḥammad Ṣarf (中略)が生涯を費やして編纂し、著述の糸に繋いだこの奇跡的(な書物)の元の言葉は、雄弁なる説明と幽玄なる教示を備え、ペルシャ語によって荘厳されていた<sup>5)</sup>。」[f.282r]とあって、ムハンマド・シャリーフなる人物が著者として挙げられている。因みに訳者は Muḥammad Guḍā b. Muḥammad Ibrāhīm, 翻訳は、1183年ムハッラム月21日(1762/6/19)

Toḡuz Kent wilāyatı の Makūlya の地で完成されたと記されている。一方、ウズベク共和国科学アカデミーには、このペルシャ語作品の写本が5本所蔵されているが、それらが冠する著者名は同一ではなく、Mulla Ḥaḡḡī, Aḥmad Sa'd al-Dīn al-Uzḡanī al-Namanganī, 'Ibād Allah al-Maḡīd 'Abd al-Šahīd b.'Abd al-Ḥamīd Samarḡandī という三人の名が見える [Sobranie 1975 : 204]。更にプレスラウ所在の写本の著者名は Aḥmad b. Sa'd al-Dīn Alāraī であるらしい [Storey 1970 : 388]。構成にも若干の相違があつて、レニングラードの D112 は、45 のバープと 30 のファスル (但第 16 は存在せず) からなり、第 18 以降の 12 のファスルは女性の聖者に当てられているが、アフマド・ビン・サード・アッディーンに帰せられる一写本は 52 のバープを含み、その第 41 から後が女性のウヴァイシーの伝記であり [Sobranie 1975 : 202-204]、イバード・アッラー・サマルカンディーに帰せられる作品は、40 のバープから成るだけで女性聖者の伝記を含まない [Sobranie 1975 : 204-206]。かかる混乱を前にして、Hofman 氏はムハンマド・シャリーフとアフマド・サード・アッディーンが実は同一人ではなかったかとも疑い、さなければ一方が他方の著作を「利用」したのであらうと推測している [Hofman 1969 : 184]。上記 4 名 (もしくは 5 名) のうち誰が真の著者であったかを決定することは現段階では不可能である。しかしながら、少なくともムハンマド・シャリーフなる人物は、次に見る如くこの作品の著者と目されるに適しい経歴の持主であつた。

##### 5. ホージャ・ムハンマド・シャリーフ

この人物の経歴を知り得るのは、彼の伝記 *Tadkira-i Ḥwāḡa Muḥammad Šarīf* のお陰である。筆者が直接目睹し得たのはレニングラード (A237, C582)、パリ (フランス学士院 MSS.3355-3)、ルント (ヤーリング・コレクション prov.164, prov. 171) の 5 種の写本であるが (ただしパリ写本には脱漏あり)、いずれの写本にも著者名及び著作年は見いだされない。これらはすべて散文の作品で、多少の語句の出入りはあるものの同一作品であることは明白である。一方 17 世紀から 18 世紀にかけて生きたと思しい Dalīlī なる詩人の手になる韻文のタズキラも存在し、その著作年は 1155/1742 年である [Imin Tursun 1985 : 478-555]。散文、韻文双方の作品の内容には相違がなく、詩人は散文の作品を忠実に擬いたと考えられる。果して然らば、散文のタズキラの成立は遅くとも 17 世紀末以前ということにならう。以下主としてレニングラードの C582 写本によりつつ、この内容を要約して紹介する。

《ホージャ・ムハンマド・シャリーフはサイラムの生まれであるが、7 才のときに父を、

12才で母を失い孤児となってサマルカンドへ赴いてマドラサ(ウルグ・ベクのマドラサと明記した写本もある)に入り,そこで30年間勉強修行に励む。一夜マドラサのうちに馬蹄の音が響き,彼の部屋の前に二人の騎馬の人物が現れる。即ちアフマド・ヤサヴィーとサトク・ボグラ・ハンである。サトクはムハンマド・シャリーフの手を取って荒野に連れて行き,「我を慕うならばカシュガルへ来よ。彼(ヤサヴィー)を慕うならトルキスタンへ行け。」と言い置いて消える。ムハンマド・シャリーフはカシュガルを指して出発し,そこに至ってサトクの墓所を尋ねて,「アルトゥシュの地のマシュハドという村」にあると知る。彼はそこに赴き,あるバイの家泊り,このバイに墓所の在処をたずねると,「このバイは先に立って行って,石だらけの場所(taşlık)を示した。墓所の標しはなく,ホージャは愕然とした。ホージャ猊下はその夜そこで祈念(tawağguh)した。三日目の夜目前にスルターン陛下が姿を現した。サマルカンドのマドラサで見た通りの姿であった。(彼は)尋ねた。やー,ムッラー・ムハンマド・シャリーフ,御苦労。ここで何して座しているのか,と。ホージャ猊下は敬意を払いつつ,おお世界の君主よ,某の有様を尋ね御教示を授けて行かれました。幸ある御跡をお慕い申し上げてやって参りましたが,見つけることが出来ず愕然としておりました,と言った。スルターン陛下は,ムッラー・ムハンマド・シャリーフよ,有難し。我も亦汝が我を慕うて来ることを望んでおった。汝よくぞ来た。我が墓所はここではない。此方ぞ,と指し示した。」かくてムハンマド・シャリーフは昼は香料をひさぎ夜はサトクの霊に会っていたが,宿を貸すバイは不審に思い,後を跟ける。サトクはムハンマド・シャリーフの不注意を責め,メッカ巡礼によってその罪を償うよう命ずる。》

このタズキラの主張するところに従えばムハンマド・シャリーフは外ならぬサトク自身のウヴァイシーであったということになる。更にもう一点,彼が目指す墓所を見付けられなかったという件は注目に値するであろう。このタズキラによれば,ムハンマド・シャリーフは973年に95才で没したと言うから,単純に計算すればその生年は878年,孤児になったのが12才のことであるから890年,それから30年してカシュガルへ赴いたのであるから,これは920/1515年の出来事ということになる。『ターリーヒ・ラシーディー』の完成(953/1546-7)に僅かに先立つ時点において,サトク・ボグラ・ハンの墓廟は完全に荒廃に帰していたのであろうか。元よりタズキラ類の示す紀年に全幅の信を置き得ぬことは言うまでもない。が,少なくともムハンマド・シャリーフのタズキラは,サトクの墓廟の再発見と興隆の功を彼一人に帰しているのである。更に言えば,以下に見る如く,彼は失われた墓所を見つけ出す霊的能力の保持者でもあった。

《様々の奇跡を現しつつメッカ巡礼の帰途についたムハンマド・シャリーフは、インドを経てラホール(複数の写本で Dahūr)に至り着く。夜、諸聖人の靈魂(arwah-i tayyiba)に祈念していると、一人の人物が眼前に姿を現し、自分は300年前にこの地に葬られたムフティーであるが、塵が入った右眼が痛むから、これを取って呉れと依頼する。翌日ムハンマド・シャリーフが人を集め土を掘り返し始めると、地主の老婆は怒って丁度狩に來会させた‘Abd al-Rašīd Hānに訴えに及ぶ。ハンがヤサウルを派遣して棺を開くのに立ち合わせると、果してホージャの言の通り、右眼に刺があった。報告を受けたハンはホージャに面会し、ヤルカンドに同行して弟子になった。その後「ホージャ猊下はハンの許しを得て、私は行って我が師(の墓所)を左遠(tawaf)しよう、と言った。ハンは三日行程のところまで来て見送って戻った。猊下はマシュハドに至り、スルターン陛下(の墓所)を遡った。カシュガルの貴顕たちはハン陛下が御手を与えられたことを聞き、すべての人々が布施(nadr niyāz<sup>6)</sup>)を手に来たって弟子になった。猊下はスルターン陛下の教導の下に7年間留まり、シャイフの務めを果たし、如何なる布施も修行道場のために費した。モスクを建て、イマームとムアッジンを定め、土地をワクフとし、シャイフ、イマーム、ムアッジン、掃除人のために定めた。ハン陛下は毎年二、三度訪れては、スルターン陛下(の墓)を遡り、ホージャ猊下と法話(ṣuḥbat)をなされた。ホージャ猊下の奇瑞によって、マシュハドの水が湧き出し、いくつもの村に人が住むようになった(ābad boldı)。この人が住むようになった村村を[ハンは(一写本による)]マザールにワクフとして寄進した。】

ムハンマド・シャリーフとアブド・アルラシード・ハンとの親しい交渉は、他の史料によっても裏付けることが出来る。即ち Šah Muḥammad Ćurās は、ハンの長子‘Abd al-Laṭīf が、カザフ、キルギズと戦って戦死したとき、ホージャがハンを同道してサトク・ボグラ・ハン廟へ赴き、加護を祈願し、出師の許しを与え、自らは「聖者たちの参詣に専念し、ヤルカンドへ行つた。」と述べている[Akimuškin 1976 : text, 11’]。同じ事件はムハンマド・シャリーフのタズキラでも言及されているが、そこでは出来事は俄然神秘の色彩を帯びることになる。

《ハンから話を聞いたホージャは、「この事は聖者方の御加護なくては叶うまじ。聖者方の靈魂に祈念して、何を御下命になろうともその如くになされよ」と言って、(サトクの廟ではなく)Yūsuf Kadir Hānの墓廟へと赴く。すると、Hidr, ウヴァイス・カルニーを始めとする聖者たち(awliya Allah), サトクを始めとする聖戦士たち(gāzi)が影向して、「ヒズル猊下——彼に平安あれかし——は、我はハンとともに行こう、と言われた。スル

ターン・サトク・ボグラ・ハン陛下は、我々(即ち戦士たち)のうちからは、ユースフ・カドゥル・ハン・ガーギー陛下が行くであろう。シャイフたる聖者方のうちからは、Şayḥ Ḥasan Başrī, Şayḥ Ğunayd Baġdādī, Şayḥ Naġm al-Dīn Kubrā 陛下が行くであろう、と言われ皆これに同意した。」ハンとホージャはそこを出て、更にいくつかの墓廟に参詣するが、そこでも聖者たちは皆影向する。「翌日、ハンは全軍を率いて出陣し、行ってキルギスたちをイッシク・キョルという地で発見し、20日間戦った。ホージャ陛下はこの20日間に残りのマザールに参詣し、(ハンの)背後から、加護を求めて送った<sup>61)</sup>。」凱旋したハンはホージャを説いてヤルカンドに伴う。ホージャは Kargalīk の地にハーンカーを設け、様々のマザールを発見するという奇瑞を示しつつ、973年の死に至る。Muḥammad Walī Şufrī が彼の後継者となる。》

以上大要を紹介して来たムハンマド・シャリーフのタズキラを見れば、先にも述べた通り、彼こそは『タズキラ・イ・ブグラ・ハーニー』の作者に擬せられるにふさわしい人物であったことが明らかである。彼はサトクのウヴァイシーであり、サトクの墓所を再発見し、時の政治権力者アブド・アルラシード・ハンをしてこれを崇拜させるとともに自らの弟子とし、マザールに多くのワクフを設定したのであるから。故 Fletcher 教授は、ムハンマド・シャリーフが Uwaysiyya という教団を創立したとのべている [Fletcher 1985 : 23]。筆者は不敏にして、この教団の名が見える史料を今のところ明らかにし得ない。しかし、サトク・ボグラ・ハン廟とムハンマド・シャリーフの墓廟への信仰を核とするまさしく教団と呼ぶに値する組織が存在したことは十分に推測可能である。アブド・アルラシードの次子で父の跡を継いでハンとなった 'Abd al-Karīm とその宰相 Ḥwāga 'Ubayd Allah は、ムハンマド・シャリーフの後継者であるムハンマド・ワリー・スーフイーの弟子であった [澤田 1987 : 68]。先述の詩人ザリーリーもこの教団の一員と思しく、サトクを讃える一編のガザルをも残している [Imin Tursun 1985 : 232]。更に又ムハンマド・シャリーフの血統を受け継ぐと称する者も存在した。例えば 1864年に勃発した清朝に対する大反乱に際し、イリ地方の権力を掌握した旧のハーキム Mu'azzam Ḥan に関連して、彼の高祖はトゥルファン Amīn Ḥwāga、その父は Mulla Niyāz Ḥwāga、その父はホージャ・ムハンマド・シャリーフであると伝えられている [Pantusov 1881 : 47-48]。もしこの所伝に誤りなくば、トゥルファン郡王家はムハンマド・シャリーフの子孫ということになるが、エミン・ホージャの時代のものと思しい別の史料には、ニヤーズ・ホージャの父は「Şufrī Ḥwāga として知られたる Mīr Ḥabrb Allah Walī Allah」であると記されている [Temir 1961 : 195]。このスーフイー・ホー

ジャは、或はムハンマド・シャリーフの後継者ムハンマド・ワリー・スーフイーその人を指すのであろうか。もしそうであるなら、トゥルファン王家は血統ではなく道統によって、ムハンマド・シャリーフにつながっていたことになる。が、いずれにしても、ウヴァイシー教団がタリム盆地の東方へ向かって教線を拡張したであろうことは、当時の情勢からも窺うことが出来る。即ち、ウヴァイシーヤはサトク廟に対する権利を新参者に奪われたため東方への進出を余儀なくされたのではないかと考えられる節があるのであるが、そのまえにモグーリスターンのハン家とサトク廟との関係を一瞥しておきたい。

## 6. モグーリスターン・ハンのヤルリグ

現在ルント大学図書館には、G.Raquette によって東トルキスタンからもたらされた7通のモグーリスターンのハンの勅書(yarlıg)が所蔵されており、そのうちの2通はサトク・ボグラ・ハンの廟のシャイフに与えられた叙任状である。その全文を紹介するには、文書形式の問題等について些か煩瑣な議論をしなければならぬのではあるが、それは7通をまとめて取り扱う予定の別稿に譲り、ここでは本稿の論旨に関わる点にのみ言及することにする。

2通の文書、prov.226と prov.227はそれぞれ、Šuġa' al-Dīn Aḥmad Ḥān と Muḥammad Ismā'īl Ḥān の名において発せられたもので、前者の日付は、1015年イヌの年 rabī' al-awwal 月初旬(1606年7月7-16日)、後者のそれは、1088年サルスの年 ġamā'īd al-tānī (= ġumādī al-aḥīr)月下旬(1677年8月下旬)となっている<sup>9)</sup>。prov.226 は剥落が甚しく解読は著しく困難であるが、興味深いことにその文言は殆ど完全に prov.227に一致するため内容を復元することがほぼ可能である。もっとも残念なことには prov.227も文書の左端が数語分欠落しており、文脈を把握し難い場合もある。

2通の文書は、ハンの弟たち、息子たち、ハン国の貴顕と諸役人、「就中、アストゥン・アルトゥジの村の上に立つ ḥakīm と dārūga... たちを始めとする大小の者ども、ḥwāga, šarīk(双方とも商人を指すか)、人民に」(7-8行。行数は prov.227による。以下同じ。)以下のことがらが明らかに理解されかし、という前文で始まり、9行目には、awwalu man aslama min al-turki al-Satūq という例のハディースが金字で記されている。以下は10行目以降の和訳である。(ローマ字翻字は本稿末尾に示す)

(10)かくの如き利益灼然の光輝に満てる墓廟及びそのワクフに先祖代々シャイフ、mutawallī, kaḍī(の任に就いて)来た(が故に、)古のハンたち、過去のスルターンたちは(その地位を)承認し、この... (11)人々を与えていた。この故に我も亦、上述の者のシャ

イフ、ムタワッリー、カーディー職を承認し、勅書の内容に鑑みて... (12) Nizām Hwāḡa をシャイフ、ムタワッリー、カーディーとなした。この光輝に満てるマザールの墓所 [mašhad という語は、元の一語を消去した上に別筆により書き加えられている。]の近隣に住いする(墓廟)奉仕の者、旅人、土地を持つ者、或は土地なき者どもは、この尊師に対し... (13)世界が服従すべき、太陽の徴たる、天の如く高き(この勅書を見るや、上述の者をシャイフ、ムタワッリー、カーディーであると知りて承認し、何人もいや何者も、この幸ある墓所と上述の土地への(14)通行を阻害、妨害し、不便、迷惑をかけ、安穩を乱す勿れ。又上述のワクフの土地を(耕作)(15)し、baḡ となしている者たちは、汝らの十分の一税を旧来の定めに従い正しく整え、白きシャリーアの掟に従って納めよ。上述の者をシャイフ、ムタワッリー、カーディー... (16)又、彼への敬意を彼に適しく実行し、彼の考え、意見を外にせず、その命令を義務と心得て、命じられた仕事の奉仕(を粗略に)(17)する勿れ。この上述の土地を許可なく承認なく占有し、耕作、建築する勿れ。耕作、建築している者どもが、命(じられた義務を)(18)実行せぬ場合には、上述の者に、取り上げて奉仕する者に与えよとの命令を我らは与えた。(以下略)

文書はこれ以下、免除されるべき税目を列挙し、勅書に背違せぬよう命じる文言を以て終っている。

この文書史料から明らかなように、17世紀、サトク・ボグラ・ハンのマザールのシャイフは同時にマザールに付属したワクフの管理者であり、アルトゥシュの村のカーディーでもあった。ワクフ地はウシュルを除き、すべての税の免除をハンの権力によって保証されていた。たとえそれが、ムハンマド・シャリーフのタズキラに言うところの、聖者の奇瑞によって湧出した水によって灌漑された土地ではなかったとしても、墓廟がワクフを有したことは疑いの余地なく明白である。文書の「先祖代々、シャイフ、ムタワッリー、カーディー(の任に就して)来た」という文言からは、シャイフの地位が世襲であったことは明かであるが、先に見た通りタズキラには、ムハンマド・シャリーフは、7年間シャイフの職務を果たし、その後ヤルカンドへ移ったと述べられているのみで、後のシャイフについては知る由もない。従って、文書 prov.227に見えるイスマーイール・ハンによりシャイフに叙せられた(もしくは、その地位を安堵された)ニザーム・ホージャなる人物が、ムハンマド・シャリーフの道統もしくは血統に連なる者であったか否かは詳かではない。しかし、これらの文書の存在から、アブド・アルラシード・ハンのサトク廟への尊崇がその子孫によっても継承されていたことは十分に窺うことが出来る。

## 7. Maḥdūm-zāda

サトク・ボグラ・ハン廟が、モグーリスターンのハン家を始めとするカシュガリアの住民から崇拝され、その規模は不明ながら相当のワクフをも有していたのであるからには、この地方における宗教的指導権を獲得しようと望む者たちが、この廟を自らの影響下に置こうと努めたことは、いわば当然の成行きであった。ムハンマド・シャリーフにおよそ一世代遅れて、カシュガリアに来った Ḥwāḡa Aḥmad Kāsānī 即ち Maḥdūm-i A'zam の子孫たちもそうした試みを行った形跡がある。

マフドゥーミ・アーザムの子 Ḥwāḡa Ishāk Walī が、ムハンマド・シャリーフの後継者であったムハンマド・ワリー・スーフイーの妨げのためにカシュガル、ヤルカンド地方での教線の拡大をひとまず断念せねばならなかったことは、既に澤田氏が指摘しておられる通りである[澤田 1987: 68]。当時、イスハークがカシュガリアに自らの宗教的権威を樹立しようとするなら、既存の権威であるウヴァイシーヤと競合し、これに勝利する必要があった。そのためには、ウヴァイシーヤをその宗教的権威の源泉であるサトク・ボグラ・ハン廟から切り離す、もしくはイスハーク(及びその子孫)が廟に対する自分たちの固有の権利を主張するという戦略が有効であった筈である。そして事実彼らはそうした主張を行った。

自身、マフドゥーミ・アーザムの子孫のうちイスハーキーヤの熱烈な支持者であったシャー・マフムード・チョラースが1105/1693年と1125/1713年の間に著した *Ants al-talibm* には次のような一節が見える。

「さて、マフドゥーミ・アーザム猊下——神よ、彼の秘密を清めたまえ——は、スルターン中のスルターン、サトク・ボグラ・ハン陛下とスルターン・イレク・マージーの子孫であられた。(このことについては)この書物の冒頭に書かれてある。彼は可視世界の支配権を放棄して霊界の王国へと赴いた<sup>10)</sup>。」

サトクの子孫であるが故に、マフドゥーミ・アーザムには現世の支配者たる資格が本来備わっていたという主張は注目値しよう。「この書物の冒頭に書かれてある」こととは、疑いもなくマフドゥーミ・アーザムの祖先 Burhān al-Dīn Kılıç に関する伝説を指す。後の *Tadhira-i Ḥwāḡagān* の冒頭にも見られるこの物語りによれば<sup>11)</sup>、メッカの住人 Kamāl al-Dīn Maḡnūn が、フェルガーナへやって来て、その地の支配者であった(カラ・ハン朝の)イレク・マージーの娘と結婚して生まれたのが、ブルハーン・アッディーン・クルチである。従ってマフドゥーミ・アーザムの一族は、遙か古に母系によってサトク・ボ

グラ・ハンの血統に連なることが主張されているのである。ブルハーン・アッディーン・クルチの名はティムール朝史料や *Bābur-nāma* にも言及されており<sup>151</sup>、中央アジアで広く崇拜されていた聖者である。彼に関する伝承の成立と変容も極めて興味深い問題ではあるが、ここでは、ことマフドゥーム・ザーデの聖者伝に関する限り、そして管見の及ぶ限りでは、この伝説はイスハーキーヤ(黒山党)の所伝にのみ見え、これと対立抗争したマフドゥーム・ザーデの他の一支イーシャーニーヤ(白山党)の側の伝承には見あたらずに、これを指摘するに止める。思うに、イーシャーニーヤが, *Hwāga Āfak* とアブド・アルラシード・ハンの娘との婚姻によって、ハン家の血統に連なることを誇り, *tūra*(モンゴル語 *tōra*, 王侯)を称し得たのに対抗するために、イスハーキーヤの側にあっては、サトク・ボグラ・ハンの血統に連なることを主張しなければならぬ、より切実な必要性が感じられたのではなかろうか。そうした事情はホージャ・イスハークの母に関するイスハーキーヤの側の伝承の変化からも窺うことが出来る。即ち、シャー・マフムード・チョラスによれば彼女の出自は以下の通りである。

「アジーザン猊下(=ホージャ・イスハーク)の母は、カシュガルのサイイドの出で、*Sayyid Ḍiyāw al-Dīn* の子孫の一人であった。スルターン・ユヌス・ハンの時代に、サイイド・ジャー・アッディーン——彼の墓を照らしたまえ——に、使節の任が授けられた。このサイイドに関してはミールザー・ハイダル・ドゥグラートのターリーヒ・ラシーディーに述べられている。この故にアジーザン猊下をマフドゥーミ・アーザムはカシュガルのホージャと呼びになった<sup>152</sup>。」

つまり、イスハークの母は、彼女がカシュガルのサイイド・ジャー・アッディーン<sup>153</sup>の娘もしくは子孫であると述べられているだけで、サトクとの関係には触れられていない。ところが、これより後代の文献では彼女はサトクの子孫であると主張されるようになり、ジャー・アッディーンの名は最早見られなくなる。例えば『タズキラ・イ・ホージャガン』では次のように述べられている。

「(マフドゥーミ・アーザムの)いま一人の妻の名はビービーチャ・イ・カーシュカリーと言い、スルターン・サトク・ボグラ・ハン・ガージーの子孫であった。即ち、神の獅子アリー(の如き)ホージャ・イスハーク・ワリー、彼(マフドゥーミ・アーザム)のこの貴き御子は、この妻から(生まれた)のである<sup>154</sup>。」

以上二つの記述の間に変化が生じるに至った理由は何であろうか。憶測を逞しくすれば、この伝承の変更—恐らくは作意的な—は、サトク廟にまつわる権益からイーシャーニーヤを排除せんとするイスハーキーヤ側の意図に出るものではなかったかと考えら

れる。マフドゥーミ・アーザムが、ブルハーン・アッディーン・クルチを経てサトクの血を引いていると主張する限りでは、イスハークの子孫とアーファークの子孫の間に違いは生じない。しかし、イスハークの母がサトクの子孫であったとすれば、その子孫は母系により二重にサトクの血統に結ばれることになり、アーファークの子孫より優位に立つことができよう。

如上の推論にある程度の妥当性を認めることを支持する文書史料がヤーリング・コレクション中に発見される。即ち prov.222であって、この文書はすくなくとも清朝による東トルキスタン征服の前夜において、イスハーキーヤがサトク・ボグラ・ハン廟を自らの影響下に置いていたことを確証するものである。文書の文字は極めて鮮明ではあるが、行文には難解な部分が少なからず存在する。敢えて全訳を試みて、読者の批正を仰ぎたい。(この文書の右肩には、ḥadrat-i mazār, mazār という二つの書き込みがあり、文中には計5箇所単語の代わりに二重斜線が引かれている箇所がある。これは、これらの箇所にも右肩の語句を代入して読むべきことを示している。なお、ローマ字翻字は本稿末尾を参照。)

(1) 彼に栄光あれ(と讃えられるべき神の)御名によりて

(2) 神の預言者の後裔の精髓

(3) ホージャム・パーディシャー陛下の聖なる命令により

(4) カシュガルの地のハーキム、イシク・アガベグとベグたち、当代の貴顕(5) 名だたる紳士たちのすべてを始め、大小の者全員、就中、アルトゥシュの地の当今の有力者、(6) 及びシャイフたち始め、総ての民草にかくの如く明白、明瞭に知られかし。マシュハドに存する光輝に満てるマザールに対し、(7) 某、現世の因縁と霊界の因縁を併せ持ちたるが故に、往古よりマザールのシャイフたちは、我らが(8) 気高き父祖、偉大なる祖先たちにより任じられて来た。この許し(?)の故に我らも亦、シャイフ・ホージャに対し、(9) マザールのシャイフ職の承襲と資格の申請を認可した。(ところが) 実に、彼が現世から永遠の世界へと旅(10) 立った仕儀により、彼の息子ミール・ホージャに、(その) 能力と資格を顧慮することなく(?) (11) マザールのシャイフ職の申請を許可した。その条件は以下の通りである。上述の者は、又新たに出現した宗派と異端の事柄を(12) 行わず、兵を徴募する者たちによく用心し、これらの人々を自らの保護者、指導者とは見なさず、(13) 常にムハンマドの宗教、ムスタファーのシャリーアを実行し、(その) 命令(と) 禁止を遵守し、自らを善性と(14) 純潔によって持し、如何なる時も、光輝に満てるマザールへの奉仕に欠失あらしめず、(15) 奉仕の義務をその義務に適しく実行すべし。彼がこの掟に

留まる限りは、何者も非難攻撃(或は)味方になれとの要求を(??)(16)する勿れ。さもなくば、この光栄に対し、何人かが高貴なる望みを数多く表明するならば、終にはその者が名誉を受けることは(17)必然である。古人の言の如く、幸福に到達せぬ者はその資格無き者なり。然らざれば、今求むる者は資格有る者なり。(18)誠に、この完璧なる助言忠告を上述の者に与えつつ、トリの年、(19)1155年ラビー・アルアッワル月5日(1742/5/10)恩寵の書は書かれた。

文書の右上には「Ḥwaḡa Ya'kūb ibn Ḥwaḡa Daniyal 'aṭa darad az dū'l-ḡalāl 1143」と刻まれた水滴型の印が押されている。文書の第15行の後半以降は特に難解であるが、案ずるに、先に述べられた条件を遵守せぬ場合にはシャイフの地位をそれを望む他の者に引き渡すという意味ではないかと考えられる。

文書にはサトク・ボグラ・ハンの名は直接には言及されていない。しかし、「マシュハドに存する光輝に満てるマザール」がサトク廟を指すことに疑いの余地はない。上引のムハンマド・シャリーフのタズキラにも見えた通り、mašhad という普通名詞は、アフガニスタンの同名の都市の場合と同じく、サトク廟がある村の固有地名になっていた。「現世の因縁」というのは、前述の如き、イスハーキーヤによるサトクの血統の継承を指すのであろう。「新たに出現した宗派」とは、或はイーシャーニーヤを卑しめて言ったものかも知れない。詳細に検討すれば、この文書からはジュンガル支配時代に関する更なる情報を引き出すことも可能であるが、ここではホージャム・パーディシャー即ちイスハーキーヤのホージャー・ヤークーブがサトク廟のシャイフを任命していたという事実だけを確認しておきたい。

## 8. Šayḥ Aḥūn Mīr Aḥmad

上述の如く、清朝征服の前夜にあってはサトク廟は確かにイスハーキーヤの勢力下にあった。その後およそ一世紀の間の経緯は全く不明であるが、19世紀中葉のシャイフはイーシャーニーヤの与党の者であった。即ち斜黒阿渾密爾愛瑪特として清朝史料にもその名がみえるシャイフ・アホン・ミール・アフマドである。ワリハーノフによれば、「アルトゥシュのシャイフ・アホンは、カシュガルにおける最も裕福で無二の有力な白山党人」であった [Valiḡhanov 1962 : 333]。1857年の所謂ワリー・ハンの反乱に際して、この人物はワリー・ハンに味方して娘を与えたが、二人の息子共々清朝側に捕らわれ処刑された。(ベリユーは二人の息子とともにとも [Bellew : 338]、長子のミール・ワリーとともに処刑されたとも [Forsyth 1875 : 189] 伝えている。) ワリハーノフはこの事件直後に

カシュガリアに入ったのであるが、清朝に没収されたシャイフの財産は、広大な土地、何軒もの家、多量の穀物の貯え、それに土地の人間が断言するところでは、ヤンプー(即ち元宝銀)50万から成っていたと伝えている [Valiḥanov 1962 : 345]。ミール・アフマドの他の三人の息子、‘Abd al-Raḥīm, Ismā‘īl, Maḥmūd はコーカンドへ逃亡したが、1861年(咸豊11)アブド・アルラヒームはカシュガルへの侵入を試みて失敗し捕らえられた[方略：卷八，咸豊十一年六月十五日；同，卷十一，八月初七日条]。マフムードは Buzurg Ḥān, Ya‘qūb Beg の一行に加わってカシュガルに戻り、ヤークーブ・ベグから、以前の規模には及ばぬものの旧領を安堵され、400人の騎兵を自らの収入で養っていた。マフムードに直接面会したベリユーは、彼がサトク・ボグラ・ハンの子孫であり、その家系は7世紀に亘ってアルトゥシュの支配者であったと述べている [Bellew 1875 : 333]。

1877年、劉錦棠麾下の清軍は新疆を再征服した。翌年2月(光緒4年正月)、劉錦棠はロシア領内に逃亡した白彦虎の送還を要求するため、トルキスタン総督カウフマンとアルマタの將軍コルパコフスキーに宛てた書簡を持たせて「回目馬木提」なるものを派遣した [左宗棠：奏稿卷五十二，探知白彦虎經俄官安置托呼瑪地方摺]。ところで、レニングラードの東洋学研究所には、*Ta’riḥ-nāma-i Ya‘qūb Ḥān* という題を持つ一写本(B772)が所蔵されており、その末尾に近い部分に清朝側の記録に符節を合する短い記述が見られる。

「Lū-sī Darīn(カシュガル道員であった羅長祐を指すことに疑いはないが如何なる漢語を写したかは見当がつかない)は... 又一月休養せよ、その後に任務を命じよう、と言った。一月後、タシュケントの総督(gubūrnaḥīr < gubernator)とアルムータの將軍(gīnīral < general)に書簡を書いて、彼はやって来た。マフムード・ハン・ベグは旅宿を重ねてアルムータに至り、Klfa-kpūskaī (< Kolpakovskij)將軍と首尾よく面会して書簡を手渡し、タシュケントへは赴けなかったため、返書をアルムータで受けとってカシュガルへ戻った(f.71r-v)。」

アルマ・アタへ派遣されたこのマフムードなる人物がアルトゥシュのマフムードその人であったことは、この写本のコロフォンの記事から明らかである。即ち、この『ターリーヒ・ナーマ・イ・ヤークーブ・ハン』の著者は外ならぬマフムード自身であって、「著者たる我、ミール・アフマド・シャイフの子、マフムード・ベグは貧しく、卑小にして、棗椰子の実の薄皮より小さく、諸物のうちの極小なる者ではあるが... men mu‘allif Maḥmūd Beg walad-i Mīr Aḥmad Šayḥ ḡarīb ḥaḳīr kamtar az ḳaṭmīr ḳalīl al-biḍā‘at olsam...(f.72r)」と記されている。マフムードは如何なる理由からか、この作品ではサト

クの名にも亦その墓廟にも全く言及していない。この作品が完成したのは1316年ラジャブ月第一日(1898/9/15)であるが、著者の当時の境遇についても具体的には語られていない。一方これより先に東トルキスタンを調査した F. Grenard は、中国人は再征服直後マフムードをハーキムに任命したが数カ月後に追放したとの伝聞を伝えており、やや皮肉にマフムードの運命を歌った民謡を採録している [Grenard 1898 : 101-103]。

## 9. Şayh Mansūr

グルナールが採録した民謡には、マフムードはコムルに流され、「マフムード・ハンの子供たちはアルトゥシュで孤児になった」と歌われている。その子供たちのうちの一人なのか、或はマフムード一族とは関係のない人物なのかは不明であるが、今世紀の初期にはシャイフ・マンズールというサトク廟の著名なシャイフが存在した。自身この人物の弟子であったという İsa Yūsuf Alptekin 氏によると、シャイフ・マンズールはアブー・ナスル・サーマーニーの子孫であり、代々サトク・ボグラ・ハン廟の墓守(türbedar)であったという。彼はアルトゥシュ以外にもカシュガルやイェンギ・ヒサールの町に hānkā, dargāh を持ち定期的にそれらを巡回していた。更に興味深いことには、アルプテキン氏はこのシャイフは Ḳādiriyya のシャイフであったとも証言している [Taşçı 1985 : 154]。彼の妻はアルトゥシュ出身の富豪 Ḥusayn, Baha al-Dīn 兄弟の姉妹であり、その息子 'Abd al-Ḳādir は東トルキスタンからイスタンブルへ赴いた最初の留学生のひとりであった。1914年、アブド・アルカーディルが Aḥmed Kemal なるトルコ人青年教師を伴ってカシュガルへ帰還し、アフメト・ケマルが新式学校を開校すると、シャイフ・マンズールは息子の Muḥīr al-Dīn を一番に入学させた [Aḥmed Kemal 1925 : 96<sup>66</sup>]。

アブド・アルカーディルはその後(詳しい年代は不明)Saman という姓を名乗り(正しくナスル・アッディーン・サーマーニーに因む姓である)、東トルキスタンの政界で活動を続けた。1936年2月には南京へ赴き、アルプテキンとともに国民党の周辺で工作した [Taşçı 1985 : 281]。Ma'sūd Şabrī が新疆省主席に就任した1947年頃に撮影されたと思しい一葉の写真には、マスードを中心に、当時の政治指導者たち、アルプテキン, Burhān Şahrīdī(即ち新疆「解放」時の主席包爾漢), Muḥammad Amīn Buğra そしてアブド・アルカーディル・サマンが並んで写っている [Taşçı 1985 : 巻末の写真]。彼が重要なポストにあったことが窺えるが、現段階では詳細は不明である。これ以後の彼の消息についても知ることはない。

蛇足ながら以上述べ来たところを整理しておこう。955—956年に死亡したと伝えられるサトク・ボグラ・ハンの墓廟は13—14世紀の交には確かに存在していた。その後一旦は荒廃に帰したのではないかと疑われる節もあるが、遅くとも16世紀中葉以前には、サトクを聖者であると見なす伝承が成立していた。この伝承の成立に自ら関わったか、もしくは少なくともその流布に寄与したホージャ・ムハンマド・シャリーフは、サトク廟を自らの宗教的権威の源泉とし、モグーリスターンのハンをしてこれを尊崇せしめた。17世紀にもハン家とサトク廟の関係は継続し、ハンは先祖代々シャイフの地位を世襲すると称する者に対し安堵状を与え続けた。マフドゥーミ・アーザムの子孫たち、就中イスハーキーヤは、自分たちがサトクの子孫であることを主張してサトク廟を勢力下に収めようと努め、事実清朝征服の前夜には、自らの権威によってシャイフを任命していた。しかし、19世紀半ばのシャイフ一家はイーシャーニーヤの与党であり、清朝支配に対する反乱やヤークーフ・ベグ政権及び清朝の再征服後の諸事件において若干の役割を演じた。20世紀初頭には開明的なシャイフが現れ、その息子は開化主義的民族運動に深く関与した。かくの如く、サトク・ボグラ・ハン廟は、イスラム化以後の東トルキスタンに対し一貫して重要な歴史舞台を提供し続けて来たと言えよう。

Lund. prov. 227

- (10) çunān \* yanglıg mazār-ı \* pur-anwār-ı \* fayd-ātārları bilä awqāflarığa aban ‘an ğadd šayh wa mutawallī wa qaḍī kelgāç ḥawaqtı-i maḍiyya \* wa salaḥn-i sabıka \* musallam tutup bu...
- (11) kişilärni berip ikändüklär bu uçurda (biz)taķı muşar ilayhning šayh wa mutawallī wa qaḍılıkını musallam tutup humāyün yarlıglarının maḍmünığa muḥḥali bolup bilip...
- (12) Nizām Ḥwāğanı šayh wa mutawallī wa qaḍī kılıp bu mazār-ı \* pur-anwār \* ning Mašhad nawāḥısideğı olturğan muğawir \* wa musafir \* yerlik wa yersiz kişiläri kim bu buzurgwārga...
- (13) ğahān-muḥā \* ḥürşid-şī‘ār \* falak-irtifa \* körgāç muşar ilayhni šayh wa mutawallī wa qaḍī bilip wa musallam tutup hiç kim balki hiç afarıda bu mašhad-ı mutabarrakagā wa (maḍkür bolğan) iligä...
- (14) hiç mammar wa rah-guḍardın munāza‘at \* ü muşarakat \* ü mudāharat \* kılıp mazāḥim ü muta‘arrid bolup taşwīš-i ḥāḥir bermäsünlär wa yenä bu maḍkür bolğan awqaf yerläri...
- (15) kılığan wa bağ etkän kişilär dih-yakingızlarını qaḍım dastūr bilä rastlık kılıp şar‘at-ı ğarrā yosunı bilä beringizlär muşar ilayhni šayh wa mutawallī wa qaḍī...
- (16) wa ikrām \* larını kamā ḥaḳkuhu beğä keltürüp olarning rāy wa istişwābın özgä kılmay amrlarını wağib ü lazim bilip buyurğan maşlahatlık ḥidmat...

- (17) kılmanızlar bu madkür yerlərini wa (sic) bī-idn wa bī-ruḥṣat mutaṣarrif bolup zirā'at \* u 'im-  
arat kılmanızlar zirā'at u 'imarat kılğan kişilər buyur...
- (18) beğay keltürmäsälär muşar ilayhğa idn berdük kim alıp ḥidmatnı beğay keltürür kişilärgä  
bersünlär

Lund, prov. 222

- (1) bi-smi subḥānahu
- (2) zubda-ı awlād-ı rasul Ullāh
- (3) ḥadrat-ı ḥwağam pādīšāh amr-ı şartflärdin
- (4) Kaşğar mamlakatınıng ḥakimi wa işik-ağası beg wa begät gamr-ı a'alt-ı rüzgār wa mawalt-ı
- (5) nāmdārları başlığ çong kiçik hamaları 'alā 'l-ḥuṣūṣ Artuğ mawdi'ining a'yan-ı 'aşlları
- (6) wa şayḥlar başlığ gamr-ı fuqarāsığa andağ rüşān u mubarhan bolsun-kim maşhat-daki mazār-  
ı pur-anwārğa
- (7) darra-wār fr'l-ğumla munāsibāt-ı şūr wa munāsibāt-ı ma'nawī bar üçün kadımtin şayḥ-ı  
mazārları bizning
- (8) aba-ı kirām wa ağdād-ı 'izāmdin muraḥḥaş bolup kelgān ikān şol ızni (sic) bilān biz ham  
şayḥ ḥwağani arzū-yı
- (9) mīrāt wa kabiliyyat-ı şayḥ-ı mazārlıqğa tağwiz kılıp edük al-ḥāl ol dunyā-yı fanidin 'ālam-ı  
(sic) baktğa intikal
- (10) kılğan taqrībidin oğlı Mtr Ḥwağani bilā ma'rifat-ı fuḍalat wa kabiliyyat arzū-yı wartat-ı  
şayḥ-ı
- (11) mazārlıqğa ruḥṣat kılduğ bi-şart ol-kim muşar ilayh ham yāngi çıkkan maḍhab wa bid'at  
işlärğa
- (12) 'amal kılmay sipāhr alıqçı salıqçılärğa tola iḥtilāt kılıp ol tā'ifanı özigä ḥāmī wa murabbī  
bilmäy
- (13) hamīša dīn-ı muḥammadi wa şari'at-ı mustafawiyyağa 'amal kılıp amr nahyni be-ğā keltürüp  
özini şalāḥ wa
- (14) fārsalık bilān tutup hiç maḥallda mazār-ı pur-anwārning ḥidmatlarıda izḥār-ı taḥṣir kılmay  
ḥakk-ı
- (15) ḥidmatnı kamā ḥaqquhu be-ğā keltürüp turğay bu yasunda tursa har neçük kişi ta'annut u  
ta'arrud da'wā-yı
- (16) şirakat kılmasun bolmasa bu şarafkä kimdä büy-ı şarafat tola zuḥūrğa kelsä aḥir şol muşar-  
raf bolmağı

- (17) *lazım (sic) çunānça kawl-ı mutakaddamın na kabil-st har ki bi-dawlat namīrasad warna zamāna dar talab mard-i kabil-st*
- (18) *bas bu ta'kidāt ū naṣāḥ-i kāmīlanı muṣār ilayhğa šāmil tutup toḥu yılı ta'rīhğa ming*
- (19) *yüz ellig beş rabr' ul-awwal ayınınğ beşi šamba küni 'ināyat nāma bitildi*

## 注

- 1) māta Satuḳ Buğrā Ḥān al-Ġazī fr sanat 344 wa mašhaduhu bi-Artuğ min kura Kašgar wa (huwa) al-yawm ma'mūr wa mazūr.
- 2) マフムード・カーシュガリーは「artuč, ネズの木。カシュガルにはアルトゥッチという名の二つの村がある。」[Dankoff 1982 : 127] と言うのみであるが、この二つの村とは、上(Üstün)と下(Astin)のアルトゥシュのことに外ならない。一方フドード・アル・アラムには B.rtuğ なる Yağma の村の名が見え、Minorsky はこれを Artuğ と読んでいる。「蛇が勝利を博した(多く繁殖した)ので人々はこの村を放棄した」という記述からミノルスキーは“The legendary details on the decay of Artuj are likely to the time before Satuq Boghra-khan's burial in 344/955(?) because Islamic tradition would hardly have allowed the resting-place of a famous champion of Islam to become a ruin [Minorsky : 96, 281]”との推論を引き出している。が、もしそうだとすれば一旦は廃墟になった村に墓所が営まれたことになり、これも些か腑に落ちない。
- 3) Taḳkira-i Buğrā Ḥānī, Institut Vostokovedeniya, D112, ff, 54v-55r. サトクのこの世への出現が預言者の死後333年であるとの記述は興味深い。即ちムハンマドの死から333年後は344年、ジャマール・カルシーが伝えるサトクの死去の年に外ならない。
- 4) ムハンマドの夜旅。Jamel Eddin Bencheikh, *Le voyage nocturne de Mahomet*, Paris 1988が最近の優れた研究である。
- 5) Ḥwāga Muḥammad Šarīf... 'umarlar šarf āylāp taṣnīf kīlğan wa ta'līf ruštasiğa alğan bu kirāmat intisāblarining rukn sözlari kim faṣīḥ ibāratlar wa laṭīf iṣāratlar birlā pārsī luğat ilā arāsta erdi.
- 6) niyāz なる語の意味については、Hamada 1990b : 476を見よ。
- 7) この部分は澤田氏によりすでに和訳されている[澤田 1987 : 68-69]。
- 8) この部分には露訳がある[Ibragimov 1969 : 235-236]。
- 9) 事実は、西暦1606年はイヌ年ではなく、1677年もサル年ではない。この齟齬については、Hamada, *sous presse* で述べた。
- 10) amma ḥadrat-i Maḥdūm-i A'zam ḳuddisa sirruhu az awlād ū aḥfād-i ḥadrat-i sulṭān-i sulṭānān Satuḳ Buğrā Ḥān wa Sulṭān Īlak maḍī būda and dar awwal-i in kitab navišta šud pādīšāhī-yi šūrīra purtafta salṭanat-i ma'nawī wašil gašt [*Anīs al-ṭālibīn*, Bodeleian Library, Ms. Ind. Inst.

Pers.45, ff. 87v - 88r.].この写本は、故嶋田襄平先生が将来された写真から堀直氏がコピーされたものをさらにコピーして使用させていただいた。従って引用の丁数には誤りがあるかもしれない。

- 11) この作品には、二系統があり、より長編のものが本来で、それをやや節略したものが第二のバージョンである。この節略本の写本中には *Tadkira-i Ğahan* と題されるものがある [Hamada 1990a : 112 - 113] が、これにはブルハーン・アッディーンの話りは含まれていない。この物語については、ひとまず [Hartmann 1976 : 196-197 ; Shaw 1897 : 31 - 32] を参照せよ。
- 12) 例えば彼は、ティムールの夢枕にたつたと伝えられている [Tauer : 72-73 ; Urunbaev 1972 : 330]。パーブル・ナーメにも *Hwaġa Mawlāna Kaḍr* の先祖はブルハーン・アッディーン・クルチであると述べられているが [Beveridge 1971 : f.16] これを *Hidaya* の著者と同一視する [Beveridge 1969 : 21] のは誤解であることは、*Kandiyya* に *Sāġirċi, Kılıċ, Margināni (=Şahib Hidayā)* の三人のブルハーン・アッディーンが列挙されていることから明らかである [Afsar 1955 : 88]。
- 13) *wālid-i ḥadrat-i 'azizān az sadāt-i Kaşġar wa awlād-i Sayyid Diyāw al-Dīn and dar zamān-i Sulṭān Yūsuf Ḥān bi-Sayyid Diyāw al-Dīn nawwara maḥkadahu muḥtadā-yi ahd bud ḥalat-i sayyid-i maḥkūr dar Ta'rīḥ-i Rašīdī-yi Mirzā Ḥaydar Duġlat ṭabt namūda ast az ān ġihata ḥadrat-i 'azizān Maḥdūm-i A'zam ḥwaġa-i Kaşġar ḥitāb mī-kardand* [*Ants al-ṭālibīn*, f. 88r]
- 14) この人物については確かにターリーヒ・ラシーディーに言及があり、ユースフ・ハンは彼をバグフシャーンの支配者 *Şah Sulṭān Muḥammad Badaḥšīr* の許へ遣わして、その娘との婚姻を求めたと記されている [Or.157, f.73r]。
- 15) *yenā bir ḥaramlāriṅing atī Brbīċa-i Kaşġarī atar erdilār Sulṭān Satuġ Buġrā Ḥān Ğāzīning awlādīdīn erdī ya'nī šīr-i yazdān Alī Ḥwaġa Ishāġ Walī bu farzand-i argūmandlārī bu ḥaramlāriṅin erdilār* [Or.9962, f. 8r - v]。
- 16) アフメト・ケマルの新疆における活動については、Hamada 1990 c : 29 - 48 を見よ。

## 文献目録

Afsar, İraġ (ed.)

1955 *Kandiyya*, Tehran.

Aḥmed Kemāl, Ḥabīb-zāde

1341/1925 *Çin-Türkistan hatıraları*, İzmir.

Akimuškin, O. F. (ed.)

1976 *Şah-Maḥmūd ibn Mirzā Fazil Ćurās, Hronika*, Moskva.

- Bellew, H.W.  
1875 *Kashmir and Kashghar*, London.
- Bartol'd, V.V.  
1898 *Turkestan v epohu mongol'skogo našestvija*, čast', i. S-Peterburg.  
1973 *Mulḥakāt al-ṣurāḥ*, *Sočinenija*, tom. viii.
- Beveridge, A.S.  
1969 *Bābur-nāma in English*, London(repr.).  
1971 *Bābar-nāma(fac-simile)*, London(repr.).
- Bencheikh, Jamal Eddin  
1988 *La voyage nocturne de Mahomet*, Paris.
- Elias, N. and E. D. Ross  
1970 *A History of the Moghuls of Central Asia ; being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haydar*, *Dughlāt*, New York(repr.).
- Dankoff, R.(ed. and tr.)  
1982 *Compendium on the Turkic Dialects*, 1, Harvard Univ. Printing Office.
- Fletcher, Joseph  
Les voies (ṭuruq) soufies en Chine, *Les ordres mystiques dans l'Islam*, éd., A. Popovic et G. Veinstein.
- Forsyth, T.D.  
1875 *Report of a Mission to Yarkund in 1873*, Calcutta.
- Grenard, F.  
1898 *Mission scientifique dans la Haute Asie*, III, Paris.
- Hamada, M.  
1990a Un aperçu des manuscrits čağatay en provenance du Turkestan Oriental, *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*, Kyoto.  
1990b De l'autorité religieuse au pouvoir politique : la révolte de Kūcā et khwāja Rāshidīn, *Naqshbandis, Cheminements et situation actuelle d'un ordre mystique islamique*, éd., M. Gaborieau et autres, Paris-Istanbul.  
1990c La transmission du mouvement nationaliste au Turkistan Oriental (Xinjiang), *Central Asian Survey*, 9 ( 1 ).
- sous presse* Rupture ou continuité : le calendrier des Douze Animaux chez les musulmans turcophones du Turkestan Oriental, *Mélanges offerts à Louis Bazin*.
- Hartmann, M.

- 1976 Ein Heiligenstaat im Islam, *Der Islamische Orient*, Amsterdam (repr.).
- Hofman, H.F.
- 1969 *Turkish Literature*, 3(1), Utrecht
- Husaini, A.S.
- 1967 Uvays al-Qaranī and Uvaysī Ṣūfīs, *The Muslim World*, 57(2).
- Ibragimov, i dr.
- 1969 *Materialy po istorii Kazahskikh hanstv xv-xviii vekov*, Alma-Ata.
- Imin Tursun(ed.)
- 1985 *Zelili Divani*, Beijing.
- ‘Irakī, Aḥmad Ṭahir(ed.)
- 1975 Muḥammad b. Muḥammad Pārsā, *Kudsiyya*, Tehran.
- Jarring, G.
- 1986 *Return to Kashghar*, Durham, tr. by E. Claeson.
- Minorsky, V.
- 1970 *Hudūd al-‘Ālam*, London.
- Pantusov, N.N.(ed.)
- 1881 *Vojna Musl'man protiv Kitajcev*, 2, Kazan.
- Shaw, R.B.
- 1897 *The History of the Khojas of Eastern Turkistan*, Calcutta.
- Sobranie
- 1975 *Sobranie vostočnyh rukopisej Akademii Nauk Uzbekskoj SSR*, 10, Taškent.
- Storey, C.A.
- 1970 *Persian Literature*, 1(1), London (repr.).
- Taşçı, M.A.
- 1985 *Esir Doğu Türkistan için İsa Yusuf Alptekin'in mücadele hatıraları*, İstanbul.
- Tauer, F.(ed.)
- 1973 Nizāmuddīn Šamī, *Zafarnāma*, I, Praha.
- Temir, A.
- 1961 Ein osttürkische Dokument von 1722-1741 aus Turfan, *Ural-Altäische Jahrbücher*, 33(1-2).
- Urunbaev, A.(ed.)
- 1972 Sharaf ud-din ‘Ali Yazdi, *Zafar-nāma*, Taškent.
- Valiḥanov, Č. Č.
- 1962 *Sobranie sočinenij*, 2, Alma-Ata.

羽田明

1982 サトック・ブラグ・ハンの改宗伝説について、『中央アジア史研究』京都, 臨川書店刊.

澤田稔

1987 ホージャ・イスハークの宗教活動——特にカーシュガル・ハン家との関係について——, 『西南アジア研究』27.

左宗棠

『左文襄公全集』

方略

『欽定裁定陝甘新疆回匪方略』